様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１３１１９

研究課題名（和文）北東ユーラシアにおけるロシアと中国の文化混在の記憶と表象

研究課題名（英文）Mixture of Russian and Chinese Culures in North-East Eurasia: Memory and Representation

研究代表者
越野　剛（Koshino, Go）

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・准教授

研究者番号：９０５１３２４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：中国とロシアの境界地域であるウラジオストクやハルビンなどの地方文化に着目し、文学や映画作品を題材にして、多文化混淆の記憶と表象、人の移動、イメージの流通について分析した。文化の均質化を志向する国民国家の枠組みとは異なり、異質な他者との共存の記憶が地方の文化アイデンティティの核となりうることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
北東ユーラシアの跨境的多文化性の特徴を明らかにすることにより、アメリカや西欧に見られるような「民主主義的」な多文化社会を相対化する新しいモデルを提示することができる。日本における北東ユーラシア地域の研究は満州の植民地化やシベリア出兵という視点が強調されがちであり、どうしても日中あるいは日露の関係性に特化する傾向があった。ここに中国とロシアの相互関係という補助線を加えることで、北東ユーラシアの文化をより立体的に描き出すことが可能になる。

研究成果の概要（英文）：Focusing on local cultures in Vladivostok and Harbin, the border region between China and Russia, this project analyzes memories and representations of multicultural coexistence, movement of people, and circulation of images. Unlike the nation-state framework, which aims to achieve cultural homogeneity, we posit the idea that the memory of coexistence with other people can be the core of local cultural identity.

研究分野：ロシア・ソ連文学・文化史

キーワード：ロシア極東　中露関係　中華街　地方文学　ウラジオストク　サハリン

１．研究開始当初の背景

1990 年代中ごろからロシア極東地域では、移民労働者や企業進出の増加により、中国の経済的な影響力が顕著になった。とりわけ APEC サミット後のウラジオストクは 1920 年代の中国人や日本人が居住した国際都市の面影を復活させつつあるように見える。他方で中国東北地域のハルビン、大連、黒河などでは「ロシア風情街」が整備され、かつての多言語・多文化の記憶が都市観光の対象として重要視されている。

北東ユーラシア地域の研究は文化史よりも実態史の方が先行している。複数の民族が混住した国際都市としてのウラジオストクやハルビンの歴史については、生田美智子、ディビッド・ウルフ、澤田和彦、原暉之など日本でも多くの研究がある。ロシア人の中国への移民については Olga Bakich や Georgiy Melikhov、中国人のロシアへの移民については Aleksandr Petrov、Aleksandr Larin などの研究により、全体的な見取り図は明らかになっている。しかし人の移動の文化史的な側面については知られていないことが多い。中国東北地方におけるロシア人の「亡命文学」については李延齢による資料編纂（および中国語への翻訳）が目立つ程度であり、ロシア極東における中国人の文化活動については研究がほとんどなされていない。中露国境を跨いだ複数の都市をひとつの文化史の中で描く視点を持った研究は国際的にみても数少ない。

他の境界地域に目を向けるなら、Elena Ikonnikova は日露、朝鮮、先住民の作品を統合したサハリンの郷土文学史の構築を行っており、Ivan Shteiner はロシア、ポーランド、ユダヤの作家を取り込んだ多言語のベラルーシ文学史の叙述を試みている。こうした研究を踏まえながら申請者は「地方の文学」に着目することにより、跨境的な地域文化の可能性を比較研究してきた。北東ユーラシアという複雑な多言語地域を研究するうえでこれらの知見が役立つことが期待された。

２．研究の目的

本研究は、ロシア極東と中国東北地方を合わせた北東ユーラシアをひとつの地域として考え、20 世紀前半と現在を比較しながら、中国とロシアの多文化混在の記憶と表象を研究することを目的とする。具体的.には以下の３点に着目した。

（１）北東ユーラシアの地方文学において、ロシア、中国、朝鮮、日本等の民族の混在がどのように描かれているかを比較分析する。とりわけウラジオストクの旧中華街「ミリオンカ」とハルビンの旧ロシア人街の文化的な表象（同時代の視点）と歴史的な記憶（現代からの視点）に着目する。

（２）20 世紀初頭の革命と戦争を背景に、中国からロシア、ロシアから中国へと並行して生じた移民・亡命という、双方向に向かう人の移動を文化の側面から比較対照する。

（３）ハルビンにおけるロシア研究、ウラジオストクにおける東洋学、それぞれの地域で学知というかたちで発展した双方向の異文化認識の伝統および研究者の人的ネットワークを分析する。

３．研究の方法

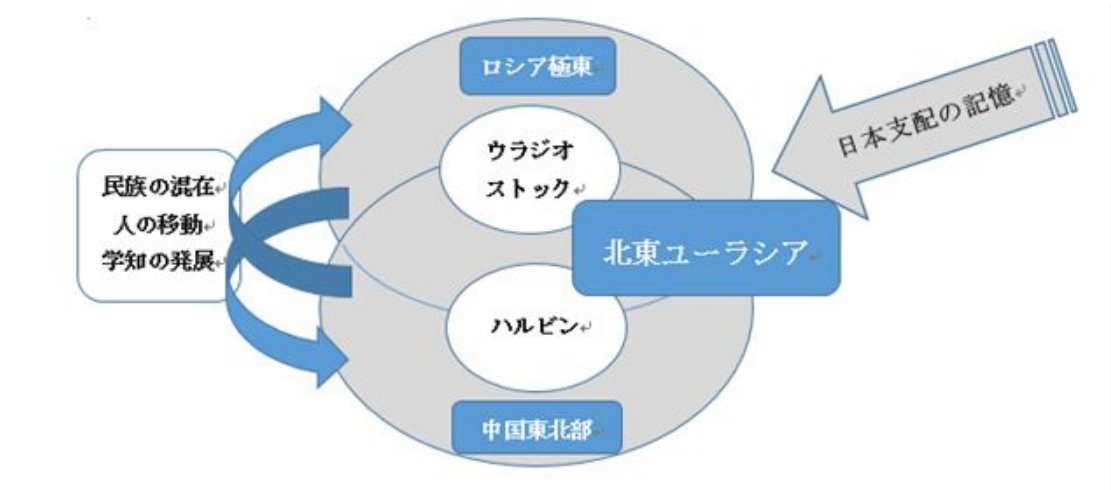
申請者はこれまでにベラルーシおよびサハリンにおいて跨境的な文学史の可能性を探る研究を行ってきた。両地域ともロシア文化の影響力が支配的だが、近年では多言語多文化混住の歴史と記憶を自らの文化のアイデンティティとして用いようとする傾向がみられる。北東ユーラシア地域において、中国、ロシア、日本、朝鮮などの多文化混住の記憶と表象が果たしている機能を明らかにするにあたって、ベラルーシとサハリンというロシア語文化圏の東西の境界地域を比較の対象項とすることができる。地域間の比較を念頭におきながら、以下の 4 点について研究を行う。

（１）【多文化・混在の表象：同時代】20 世紀前半のウラジオストクとハルビンにおける多民族の混住、とりわけ前者の中国人街と後者のロシア人街について書かれた文学作品や新聞雑誌記事を収集する。ウラジオストクについては、日本に亡命したニコライ・マトヴェエフ、その息子で未来派詩人ヴェネディクト・マルト、ソ連作家パヴェル・ダレツキーなど、ハルビンについては、蕭紅、蕭軍、疑遅、古丁など、それぞれの都市で活躍した作家・詩人の作品を取り上げる。第二次世界大戦以前の両都市には日本人も多く居住しており、日本語で書かれた中国人街やロシア人街の描写も重要である。中国語の資料も可能なかぎり参照する。日本国内だけではなく、ロシア極東や中国東北地方での資料収集が必要となる。

（２）【多文化・混在の記憶：現在からの視点】20 世紀後半から 21 世紀にいたる北東ユーラシア地域において、多文化混住という過去の記憶がどのようにして現在の地域のアイデンティティの確立に寄与しているかを調査する。ウラジオストクの作家アレクサンドル・トコヴェンコ、イリーナ・ムトフチイスカヤなどの作品に描かれる過去の中国人街のイメージ、ハルビン作家の遅子建の小説『満州国物語』（2000 年）、霍建起の映画『初恋の想い出』（2005 年）『蕭紅』（2013 年）などに描かれるようなハルビンのロシア人街のイメージを比較分析する。ロシア語で書かれたハルビンの記憶、中国語で書かれたウラジオストクの記憶についてもテキストを収集する。また資料収集だけではなく、現地の作家や研究者へのインタビューも重要である。

（３）【双方向の移動】ロシア革命後の亡命者の中で東に向かう流れはウラジオストクを経由してハルビンや上海に向かう場合が多かった。中国からの主として労働移民はハルビンを経由してウラジオストクなどのロシア極東を目指した。ニコライ・バイコフ、アルセニイ・ネスメロ

フ、アレクセイ・アチャイル、ヴァレリイ・ペレレシンなどの作家は上記のルートをたどってハルビンで活躍した。ウラジオストクの中国人街では東北地域を経由してきた中国の芸能人が演劇公演を行ったことが知られている。移動する作家・文化人の残した記録を調べると同時に、こうした移民の流入自体がそれぞれの地域社会でどのように認識されていたかを同時代の資料をもとに調査する。
（４）【双方向の異文化認識・学知の発展】ウラジオストクでは東洋学院（極東大学）が 1899 年に開かれ、中国語教育を行っている。ハルビンではロシア語教育で有名なハルビン学院が 1920 年に開設された。戦後は中華人民共和国により黒竜江大学が設立され、やはりロシア語教育に力を入れている。それぞれの地域における異文化研究・言語教育の歴史を比較研究し、大学卒業者の進路選択、大学の研究者と地方の作家や文化人のネットワークを分析する。



４．研究成果
実施期間中に主として以下のような研究活動を行った
（１）ウラジオストクに存在した中華街「ミリオンカ」の歴史文化的な記憶を研究した。地方作家イリーナ・ムトフチイスカヤが「ミリオンカ」を舞台にして書いた『海参崴』シリーズ（2009-2018 年）を題材にして、比較のためベラルーシの作家ヴィクタル・マルチノヴィチがミンスクの架空の中華街を描いた『墨瓦（モーヴァ）』を参照した。空想を交えた地下都市のイメージの中に多文化的な歴史の重層的な記憶が表象されており、また中国文化のエキゾチズムが境界地域の現在における帰属意識の核となる可能性が肯定的に示されていることを明らかにした。2018 年 10 月に開催されたシンポジウムでこのテーマについて研究報告を行い、また 2019 年度中に成果を論文として発表する準備を進めている。
（２）ウラジオストク・ハルビンという露中境界地域は日本による植民地化を経験しており、その点でサハリン・樺太という日露境界地域と比較することができる。寒川光太郎・宮内寒弥などの日本語による「樺太文学」のテクストを取り上げ、日露の文化混淆の痕跡を分析した。とりわけチェーホフによるサハリン旅行の記憶が日本側の樺太においても大きな意義を持った点を明らかにした。2017 年に日本比較文学会全国大会でワークショップ「南北極域の比較文学—アイルランド、パタゴニア、樺太—」を企画して、このテーマについて研究報告を行った。2019 年度中に成果を論文として発表する予定である。
（３）1950 年代の中国では大量のソ連映画が受容されたが、2000 年代以降になって中国側によるリメイクが盛んになった。黒河・ブラゴヴェシチェンスク両市の国境地域で撮影された TV ドラマ『朝焼けは静かなれど』もソ連映画が元になっている。こうした映画とその現代的翻案を題材にして、中露間の文化の流通について研究した。台湾、上海、ウランバートルなどの国際学会で研究報告を行い、成果の一部を論文として刊行した。
（４）2018 年に北海道大学で映画上映・研究会「ユートピアと記憶の亡霊：東南アジアのドキュメンタリー映画」を開催した。華僑と社会主義の関係について意見交換を行い、ロシア極東における中国系移民の役割との比較において知見を得ることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）
①越野剛「接吻と白鳥とソ連映画—『1918 年のレーニン』の中国における受容」『連環画研究』8 号、2019 年、69-84 頁、査読無
②越野剛・田村容子「連環画の中のソ連：女性兵士の物語『朝焼けは静かなれど』の受容」『連環画研究』7 号、2018 年、48-66 頁、査読無

〔学会発表〕（計 7 件）

①越野剛「ベラルーシと極東における中国イメージの比較」シンポジウム「東欧文学の多言語的トポス：複数言語使用地域の創作をめぐる求心力と遠心力」2018 年 10 月 6 日、東京大学（東京都文京区）
②越野剛「Китайская адаптация советского фильма «Ленинв 1918 году（ソ連映画『1918 年のレーニン』の中国における受容、ロシア語）」、第 9 回スラブ・ユーラシア研究東アジア学会、2018 年 6 月 30 日、モンゴル国立大学（モンゴル、ウランバートル）
③越野剛「Влияние советского фильма в Китае: «А зори здесь тихие…»（ソ連映画の中国における影響：朝焼けは静かなれど、ロシア語）」、フォーラム「世界文学におけるロシア語文学」、2017 年 10 月 18 日、上海師範大学（中国、上海）
④越野剛・田村容子「Images of Female Soldiers in Russia and China: Chinese Acceptance of the Soviet Film *The Dawns Here Are Quiet*」、国際シンポジウム「東アジアにおけるヨーロッパの言語」、2017 年 9 月 30 日、国立台湾大学（台湾、台北）
⑤越野剛「1930 年代の日露作家の樺太／サハリン表象」、日本比較文学会ワークショップ「南北極域の比較文学—アイルランド、パタゴニア、樺太—」2017 年 6 月 17 日、山形大学（山形県山形市）
⑥越野剛「Утопические образы Китая в современной русской и белорусской литературе（現代ロシア・ベラルーシ文学における中国のユートピア的イメージ、ロシア語）」、国際学術会議「ユートピアからカタストロフへ：ソ連の文化実験」、2016 年 9 月 1 日、ベオグラード大学（セルビア、ベオグラード）
⑦越野剛「ソ連、中国、ロシア—戦争映画『朝焼けは静かに』のリメイク」、研究会「紅い星に願いを：社会主義文化の伝播と比較」、2016 年 8 月 21 日、北海道大学（北海道札幌市）

〔図書〕（計０件）

６．研究組織

（１）研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8 桁）：

（２）研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。